環境新聞　2007/3/21（2面）掲載

環境ベンチャーの挑戦に期待

TOKYO起業家サミット2007開催

二〇三〇年には、売り上げ一〇〇〇億円超の環境ベンチャーを一〇社以上に――。十一日に東京都港区の赤坂プリンスホテルで開催された「TOKYO起業家サミット・大挑戦祭2007」（主催・ベンチャーエンタープライズセンター　起ちあがれニッポン　ドリームゲートプロジェクト）では、環境がテーマの討論会を実施。イースクエアのピーター・ピーダーセン社長を始め、サティスファクトリーインターナショナルの小松武司社長、省電舎の中村健治社長、北海道グリーンファンドの鈴木宇事務局長、リサイクルワンの木南陽介社長ら環境ベンチャー経営者五人が「環境分野には大きなビジネスチャンスがまだまだ眠っている」と口を揃え、挑戦を呼び掛けた。

環境ベンチャー経営者５人が熱い議論を展開した

1000億企業、10社超す

30年

同プロジェクトは、国内で起業文化の確立を目指して〇三年四月に発足。経済産業省の後援を受けて、起業家約七〇〇人のネットワークなどを通じ、起業家育成・支援のための各種イベントを実施している。

十一日開催の討論会もその一環で、ITや金融、エンターテイメント、ファッション、教育など一二分野で開催。先駆的な気鋭の国内外ベンチャー経営者がそれぞれ参加し、ビジネスの方向性などを議論した。

「ビジョンがない」

このうち、環境がテーマの討論会では、ピーダーセン氏が「今後、環境ビジネス市場の成長が見込まれており、すべての産業において横断的に対応を考える必要が出てくる。しかし日本には、大きな戦略やビジョンがまだないし、失敗のリスクを取ろうとする考え方自体が浸透していない」と指摘。特にLOHAS調査で環境や健康に対して六割が関心を持つと答えるなど、一人ひとりの関心は高いにもかかわらず、「システム全体になると動きが鈍くなる」と課題を挙げた。

また、風力など自然エネルギー分野で市民ファンドを展開し、日本の後進性を感じることが少なくないという鈴木氏は、「制度を変えていくことも チャンスにつながる」と主張。利益がきちんと出るような仕組みを用意することで、「好きな人」だけでなく、個人の出資のすそ野を広げることができるようなビジネスモデル構築を目指す姿勢を強調した。

対策をチャンスに

更に、小松氏は「成功するために最も大切なのはチャレンジスピリット」と精神面の重要性も併せて強調。「環境はすべての産業がマーケットに成り得る。センスが良く、タフな経営者の挑戦を期待している」と述べた。中村氏も、「環境は他分野に比べても企業にとってビッグチャンス。とにかく困っていることがあれば、その対策は必ずチャンスにつながる」と訴えた。

最後に、木南氏が「環境ベンチャーが先頭に立って社会を変える原動力になるためにも、『二〇三〇年に売り上げ一〇〇〇億円超を一〇社以上に』の目標を共有しよう」と呼び掛けると、参加者も賛同。討論会は熱気に包まれながら閉幕した。